

SPF 豚 4 年間の生産実績と今後の課題

(株)グリコ畜産センター 第三牧場長 松本親弘

1. 農場の概要

当農場は標高430m, 北緯37度, 東経140度の那須高原に位置し, 冬季の夜間気温が零下5度程度に低下することは再三であるが, 積雪はほとんど無い。夏季は日中30度以上に上昇するものの, 朝夕は涼しく熱帯夜になることは稀である。

付近は平地林が多く, 集落付近に田畑が集まっている農村地帯で当農場の周辺500m以内には人家は無い。交通の便は良く, 東北新幹線の那須塩原駅や東北自動車道の西那須野インターチェンジより各々10km, 東京より2時間以内

で到達できる。

当農場の総面積は約6ha, 建物は19棟, 総面積11,258m², 飼育頭数7600頭(母豚600頭, 種雄豚30頭, その他6,900頭), 従業員14名となっております。昭和54年当初, 導入肥育専門農場として開設したが, 59年に繁殖部門を新設し, 住商飼料畜産(株)よりSPF豚を逐次導入し, 62年より完全一貫生産体制が確立された。以下平成2年度から5年度までの生産実績を表に表わすとともに, 年々厳しくなる養豚業界で今後生き残っていくために何をすべきか考察する。

2. 生産成績状況

	平成2年度	3年度	4年度	5年度
母豚当り離乳頭数(頭)	20.5	20.5	22.3	23.2
母豚当り出荷頭数(頭)	19.9	20.0	20.2	21.7
死亡淘汰率(25kg~出荷まで)	2.53	2.32	3.06	3.10
農場飼料要求率(%)	3.37	3.25	3.30	3.30
年間母豚更新率(%)	25.0	35.1	24.3	22.3

3. 防疫管理

1) 衛生費(肉豚1頭当り)

	平成2年度	3年度	4年度	5年度
対象薬剤(円)	352	320	299	297
対象外薬剤(円)	426	408	406	277
計	778	728	705	574

備考) 対象薬剤, 対象外薬剤は日本SPF豚協会の認定制度に基づく。

SPF 豚 4 年間の生産実績と今後の課題

2) 防疫設備

- ①農場正門入口に、車輛等消毒装置を設置。
- ②農場内に入る場合には、必ずシャワーを浴びてから入場する。
- ③各建物、分娩室、育成室、種豚室出入口に踏み込み消毒槽を設置。
- ④種豚が種豚舎から分娩舎に移動する場合には、豚体洗浄消毒室を通して移動する。

4. 福利厚生

- 1) 年間労働日数は264日であり、月平均22日である。
- 2) 就業時間は、午前8時～午後5時までで、1日実労働時間が7.5時間、年間1,980時間である。残業は無く、分娩看護のための宿直等の夜間勤務も無い。
- 3) 待遇
職能給制、昇給年1回、賞与年2回、正社員定年60歳、以後嘱託65歳まで。
- 4) 福利厚生
各種社会保険、任意労災保険、通勤途上災害保険加入、退職金制度、海外研修等。

5. 今後の課題

1) 低豚価時代への対応策

今更述べるまでもなく、現在及び将来の養豚業界を取り巻く環境はかつてなく厳しいものであり、特に豚肉の消費が伸び悩んでいる所に牛肉及びチルドポークの輸入が増大したことで最早高豚価は望めない時代になって来たと言える。

このような環境の中で打つべき対策は、生産性の向上を第一に考えて、いかに肉豚1頭当りの生産コストを下げるかということと、生産し

た肉豚をいかに高く販売するか、の2点であると考えられる。

つまり生産コストに関係する要因、例えば飼料価格を下げた飼料費の低減を図り、より一層高効率な豚を飼育することが必要である。

以下に生産性の向上のために行っていることと、それ以外に行っている対策を述べる。

2) 生産性の向上

①繁殖率成績の向上

分娩率を向上させるために人工授精を積極的に取り入れ、種付のウェイトを人工授精に置いている。また人工授精を行うようになって種付適期の判定を確実に行うようになり、結果的に分娩率の向上につながっている。

また、分娩後の子豚の生存率を改善させるために、昼間に分娩するように計画分娩を行い、分娩看護の徹底を図っている。

②事故率の低減を図る。

③労働生産性の向上

企業養豚（サラリーマン畜産）では1労働時間当りの生産性が重要である。

良い人材を得るためには労働時間の短縮と高賃金が不可欠である。

3) 公害対策

①糞尿処理

醗酵乾燥施設（長さ100m、幅10m、3ライン）で処理を行い、乾燥処理後は、袋詰め特殊肥料として年間約5万袋販売している。尿は曝気後農場へ散布している。

②悪臭対策

防臭剤（エクセル酵素）を豚舎および糞尿処理場へ定期的に散布している。

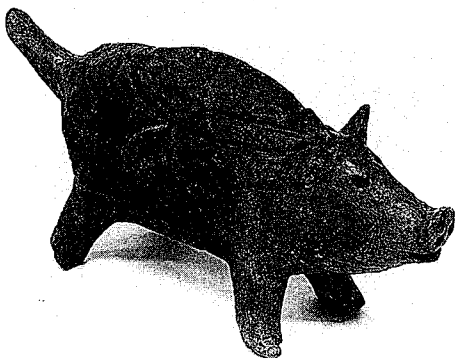
4) 肉豚の有利販売

SPF豚は、生産する側にのみ生産性の向上というメリットがあるのではなく、消費者にとってもその特長を享受できる商品である。そのため流通段階において一般の豚肉との差別を行いSPF豚の肉として有利販売できるわけであるが、これまで明確に一般の豚肉と差別化できてきたかという点、疑問であると言わざるを得ない。これは生産された豚肉が食卓に上がるまでのそれぞれの段階において、SPF豚の肉で

あるという認識が徹底されていなかったためではないだろうか。

ここにきて、日本SPF豚協会の主導による、SPF豚認定制度が発足することになり、ようやくSPF豚本来の特質を生産から流通・小売りの段階まで生かすことが出来るようになった。当農場もこの制度を利用することによって一層の有利販売を図り、厳しい養豚業界の中で生き残りを懸けてチャレンジを続けて行きたい。

ブタ・ア・ラ・カルト



青森県十腰内遺跡から出土した「猪型土製品」

青森市の三内丸山遺跡は縄文時代の大遺跡群として発掘が進められていますが、これは弘前市の十腰内遺跡から出土したもので、標記のように呼ばれています。しかし牙はあるものの猪と異なり、前駆よりも胴体の発達が良いことを考えると、豚と言った方が良いのではないのでしょうか。本遺跡は縄文後期とされており、既にBC6,000年代のジェリコ等の西南アジアの農耕遺跡から豚の骨が出土していること、中国でもBC2,500年前後には豚が飼われていたことを考え合わせるとますますその感を深くします。

(写真提供：弘前市立博物館)